

イギリス—紅茶の歴史

友田 卓爾

イギリスといえば紅茶。紅茶といえばアフタヌーン ティー、そしてリプトン、トワイニング、ウェッジウッド……。茶樹・砂糖きびの生産地でない島国イギリスで紅茶が「国民的飲料」になるまでの300年の歩みを三段跳び（ホップ・ステップ・ジャンプ）に準えて跡づけてみたい。



平成22年12月21日 TSS文化大学で講演する筆者

はじめに

茶は非発酵茶と発酵茶に大別される。発酵させないものは緑茶、発酵させたものは紅茶、発酵を途中でとめたものは烏龍茶である。茶の原産地は、中国の雲南地方からインドのアッサム地方にかけての山岳・丘陵地帯だといわれる。中国茶の歴史は紀元前にまで遡るが、唐の時代（618—907）にはかなり普及した。日本に茶が伝わるのもこの時期である。

（1）ホップ—17世紀

①商品として茶を最初にヨーロッパにもたらしたのはオランダ商人で、それは17世紀はじめのことである。17世紀のヨーロッパには、茶（緑茶）のほかにコーヒーや液体のチョコレートが入ってきたが、これらの舶来飲料のうち、イギリスでは茶が人気を博することになる。その理由としては、コーヒーやチョコレートがフランスやオランダに栽培・貿易の主導権を握られたために価

格が割高であったこと、イギリスの水が軟水で香りの豊かな茶に適していたことなどがあげられる。

②1650年代からロンドンで隆盛した「コーヒーハウス」では、はじめはコーヒーが人気だったが、次第に茶のほうが好まれるようになった。18世紀前半にかけて大流行したコーヒーハウスは、議論の場として、また情報センターとして大きな意義をもった。



図1. 1700年頃の初期のコーヒーハウス：1ペンスの入店料を払うと、新聞を読んだり、トランプに興じたりなどでき、情報を交換する場でもあった。（参考文献4より）

コーヒーハウスでは、ほぼ同時期に伝わった舶来の飲み物であるコーヒー、茶、チョコレートのどれかを飲みながら議論が交わされ、情報交換や商取引がおこなわれた。コーヒーハウスには幾種類もの新聞が置かれていた。18世紀にはいると雑誌も登場した。

王立取引所のすぐ近くのコーンヒル（今日、地下鉄バンク駅から地上に出た金融街）にジョナサン・コーヒー・ハウスがあった。ジョナサンの店は、株式仲買人や投機的商人のたまり場で、いわば非公式の株式取引所であった。そのほかにも、船舶や砂糖などの競売で知られるギャラウェイ・コーヒーハウスがあった。エドワード・ロイドが開いたコーヒーハウスには保険引き受け業者たちが集まって取引をおこなった。それが今日のロイズ保険機構の起源である。

③1660年代になると、茶は宮廷から上流階級の女性のあいだに広まった。そのきっかけをつくったのは、チャールズ2世のもとにポルトガルから嫁いだ王妃キャサリンで、嫁資として、銀と同じくらい貴重品であった中国茶やブラジル産の砂糖を持参した（カリブ海西インド諸島のジャマイ

カ島やバルバドス島がイギリス領になったのは17世紀中頃である。それ以前の主たる砂糖産地はポルトガル領ブラジルであった。)

その後17世紀末から18世紀初めにかけてメアリ2世、アン女王の時代に、宮廷から喫茶の風習が広まり、中国産の紅茶に西インド諸島産の砂糖を入れて中国製の磁器で飲むことが上流階級のステイタスシンボルになった。



図2. 初期の喫茶の風景：中国風の取手のない茶碗で飲んでいる。まるで薬を飲むみたいな真剣な顔つきである。（参考文献4より）

（2）ステップー18世紀

①イギリス東インド会社が中国茶を輸入しはじめるのは17世紀中頃のことである。当時、茶は頭痛・胆石・風邪など万病に効く薬として宣伝されており、コーヒーハウスで売られるほか市販された。コーヒーハウス店主のトマス・トワイニングが茶の小売りを始めたのは1710年代のことである。トワイニングの店舗は今でもストランド街の裁判所のほぼ真向かいにある。

②18世紀はじめのイギリスでは三つの舶来飲物のうち茶が優位を占めていたが、砂糖の生産量が伸びるにつれて、緑茶よりも紅茶が選択されるようになる。砂糖はイギリス領のバルバドス島・ジャマイカ島のプランテーションで生産されており、その労働力はアフリカ西海岸で獲得された黒人奴隷であった。

奴隷の買い付けに支払われたのは綿布・鉄砲・ビーズなどであったが、とりわけインド綿布の人氣が高かった。奴隷貿易の拠点リヴァプールには奴隷・砂糖貿易を通じて巨額の資本が蓄積された。この資本がリヴァプールの後背地マンチェスターに木綿工業を発展させた。（産業革命の興り）



図3. 「三角貿易」 ——黒人奴隷を満載した中間航路（参考文献1より）

③奴隷労働によって砂糖が大量生産され値段が大幅に安くなったことや、茶に対する輸入関税が引き下げられて茶の値段が安くなったことによって、18世紀中頃から後半にかけて紅茶の消費量は急激に増えた。国産のウェッジウッド磁器が誕生するのはその頃である。

クリーム色のボーン チャイナ（骨灰入り磁器）で知られるウェッジウッド会社（2009年に経営破綻）であるが、ジョサイアが創業したのは1760年頃である。すでにオランダのデルフト焼やドイツのマイセン窯が知られていたが、ウェッジウッドは技術改良や機械化によって庶民向けの価格での製造を可能にした。



図4. ジョサイア・ウェッジウッドの代表作ティーポット（参考文献4より）

（3）ジャンプー19世紀

①19世紀のイギリスでは、茶に砂糖とミルクを入れて飲むことが一般庶民の間にも浸透して、紅茶は次第に国民的飲料になる。1834年に東インド会社の中国貿易独占権が撤廃されて貿易が自由化されたことや、アヘン戦争（1840-42年）によって中国市場が開放されたために、安い値段の紅茶が大量に輸入されたからである。1800年頃と比べてイギリスへの茶の輸入は1841-61年の間に約2倍に増加している。



図5. ティーパーティー：上流・中産の人びとのあいだにアフタヌーンティーの習慣が定着するのは19世紀に入ってからである。（参考文献4より）

②1860年代から紅茶の消費量が爆発的に増えた。これまで中国が唯一の紅茶の供給国であったが、インドのアッサム州奥地で茶樹が発見されたのをきっかけにして供給国に大転換が起こったからである。紅茶栽培の中心はアッサム州であるが、その後ダージリンなどにプランテーション方式（大規模な資本主義的経営）の茶園が拡大された。セイロン（現在のスリランカ）でも茶園の開拓が進められた。インド人労働力を使って価格の安い紅茶が大量にイギリスに供給されるようになると、小規模な家族経営によって生産された中国産の紅茶はイギリスから後退した。

19世紀中頃から一般庶民の飲物として紅茶の消費量が爆発的に増大する。それにつれて、一人当りの砂糖の消費量も急増する。

③1890年以降、トマス・リプトンがセイロンでプランテーション経営に乗り出し、「茶園から直接ティーポットへ」を宣伝文句にセイロン紅茶を産地直送して、紅茶産業を世界的規模に発展させた。

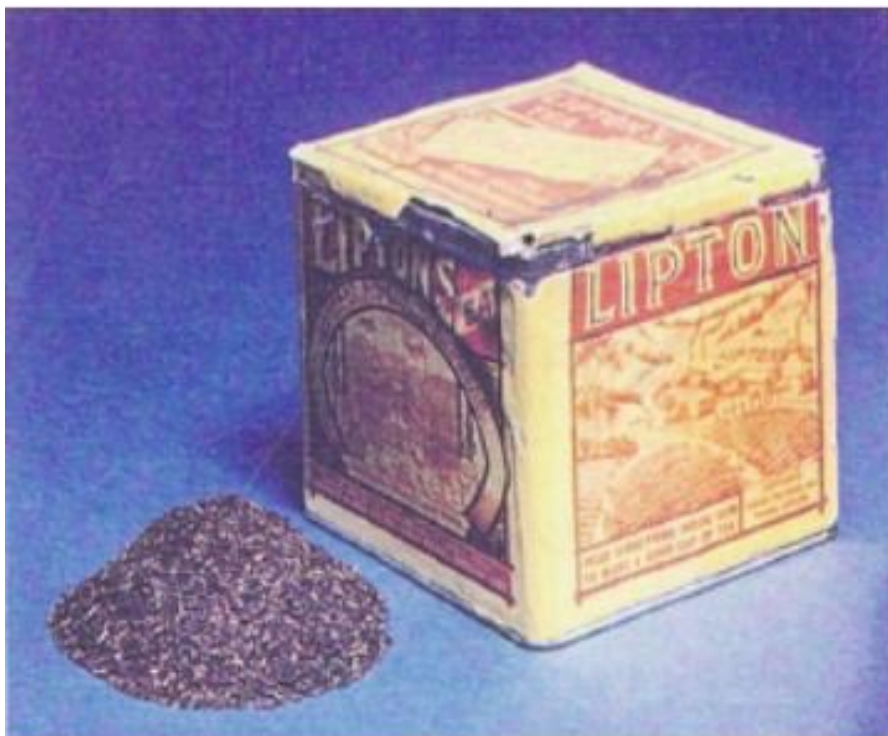


図6. リプトン紅茶の黄ラベル（黄缶）（参考文献4より）

リプトン紅茶の黄缶は世界的なベストセラーになった。日本でも1907年から発売された。

おわりに

イギリスにおける紅茶の歴史（普及・定着）は、資本主義の歴史（大英帝国の形成・完成）と同時進行であり、人びとのライフスタイルに大きな変化をもたらした。砂糖とミルクを入れて飲むイギリス人の茶の楽しみ方と、世界経済の外にあった鎖国下の日本人の茶の楽しみ方を比較してみるのも面白いだろう。日本で喫茶が「日常茶飯事」（国民的飲料）になるのはいつ頃からであろうか。わび・さびの茶道を大成した千利休の時代ではない。緑茶が抹茶（粉末茶）から煎茶（葉っぱ茶）に転換してから以後のことであろうし、茶子（和菓子）に使用される砂糖が輸入ものから国産ものになる18世紀後半以降のことであろう。

<参考文献>

1. 川北稔『砂糖の世界史』（岩波ジュニア新書）
2. 角山榮『茶の世界史』（中公新書）
3. 角山榮・村岡健次・川北稔『産業革命と民衆』生活の世界歴史10（河出書房新社）
4. 小池滋・荒木安正ほか『紅茶の楽しみ方』（新潮社）
5. 大江一道監修『世界史の情景 近現代I』（飛鳥）

（本稿は、2010年12月21日にT S S文化大学で行われた講演の概要である。）